

いま「合奏」は可能か？

Is "OUR MUSIC" Possible Now?

心・技・体を整えて広場にのぞむために

これから公共の場で音楽・アートイベントを展開するとき、何がその
ベース
基盤になりうるのか？ 齋藤貴弘（弁護士）、飯石藍（公共空間プロ
デューサー）、近江正典（僧侶）、稲葉俊郎（医師）、ZAK（サウンドエン
지니어）。5人のスペシャリストに聞いてまとめた“提言書”。 *tant*

TOKYO ART
RESEARCH LAB

公共空間を
営みの場所として
取り戻すには
どうすれば
いいでしょうか？

まもなく、開演。

オーケストラはホール舞台に姿を現すと、めいめい調弦を始める。バンドはスタジアムのステージ上で、ギターとベースが顔を合わせ爆音でチューニングを始める。音楽を奏でる前に行なう、音を合わせながら呼吸も合わせていく、大切な時間。

「音による芸術」と定義される音楽は、人類の有史以前より存在し、さまざまに形を変えて今も私たちのそばで響き続けている。産業化以降、レコード、カセットテープ、CDといったメディアを通して聴かれていた音楽は、いつしかインターネット上のデータとして形を持たず、所有しない状態が常となった。そして時代はモノからコトへ。近年ではライブハウスや劇場といった、現場で体験する音楽がより強く求められる時代になった。

そんなときにふと考えたのが、音楽の新たな可能性だった。音楽を、鑑賞するための存在から、もう少し手元に引き寄せることはできないか？ 音楽そのものを、人間同士を結びつけ、混ぜ合わせるメディウムとして捉えることはできないか？ そうして2010年の夏に始めたのが「ほくさい音楽博」という地域活動だった。0歳から100歳までの誰もが楽しめる投げ銭コンサート。真夏の夕刻にスティールパンとフ

ラの調べ。響きの美しい音楽に吸い寄せられるように集まった100人が、まるで大きな居間にでもいるような、温かく柔らかな時間が流れた。学校行事や祭礼とも異なる、音楽が結んだ、どこか懐かしい近所の集まり。あの感覚を今でも忘れることができない。

あれから10年。

東日本大震災を経て、現在は新型コロナウイルスの感染が拡大していくのか収束していくのか、誰にもまったくわからないという令和2年3月を過ごしている。そのような状況の真ただ中であって、音楽とアートを用いて、人と人とが混ざり合う姿を描くプロジェクト「隅田川^{すみだがわどとう}怒涛」を開催しようと、粛々と準備を進めている。本プロジェクトは足立区千住から中央区築地まで、隅田川沿いの約10kmが舞台。ふだん目の当たりにできないような圧倒的なパフォーマンスを、その流域圏に住まい、働き、通う全世代・全人種に心から楽しんでもらい、隅田川を江戸の頃のような“営みの場所”として返り咲かせたいという取り組みで、東京都による2020年オリンピック・パラリンピックの文化プログラムという位置づけでもある。

2002年、今から18年前に日本で初めて行なわれたサッカーワールドカップ。その予選、メキシコVSクロアチアを観戦

するため新潟スタジアムに足を踏み入れた瞬間の違和感が、本書の問いの入り口にもなっている。

当時「ビッグスワン」という名称だったそのスタジアムは、外観も内装も驚くほどすべてが素っ気なく、座席同士やフィールドと座席との距離感が冗長で、全体の呼吸感のようなものが感じられない造りだった。なにか、同じ空間にいながら人と人とが離れ離れにさせられてしまうような感覚（さらにさかのぼれば、後樂園球場が東京ドームに変わったときにも同じような感覚を味わったような気がしなくもない）。それに比して、この日のメキシコ代表11人は、勢いがあり緩みがあり、驚くほど怠惰だと思った瞬間に全員が連動して躍動していく、瑞々しく人間味あふれる、まさに“人の営み”そのものとも言えるようなチームサッカーを繰り広げ、勝利を収めた。同じ空間に期せずして同居した、営みと規制。このスタジアムの造りは、現在に通じる日本的な管理と規制を象徴していると感じるのに充分で、この違和感が今でも通奏低音としてずっと自分の中に響き続けている。

あの頃から、世の中は良くなっているだろうか？

残念ながら、もろ手を挙げてYES!と答える人の数は少ないだろう。今まさに起きている新型コロナウイルス騒動や全国で生じている表現規制の動きなど、なにかと不安や不満が先行してさまざまな空間が閉じていってしまいがちな世の中で、

あえて「音を鳴らして混ざり合う」のは、正直勇気のいることだ。でも、だからこそ果敢にチャレンジしていきたいし、そのことが引き起こす作用・もたらす効用は大きなものだと信じたい。とはいえ、それと同時に起きるハレーションはそう小さくはないだろう。

今回の問い、「公共空間を営みの場所として取り戻すには？」に答えるために、音楽、ひいては芸術活動は必要不可欠な要素であると私個人は考える。なにより自分が生まれてこの方ずっと、音楽に助けられてきたこと。また、世界各地で多種多様なその作用・効用を目の当たりにしてきたこともその確信の原点と言える。音楽という形のないものが公共空間で鳴らされることには、不安を招く側面もたしかにありうる。ある場に響く音が騒音として認定されることとパラレルに、安全性や健全さを過剰に求める社会においては、一見よくわからない芸術活動は「ノイズ」として真っ先に除去される対象になりうる。いまや公園では、やっていい遊び、奏でていい音楽が箇条書きに示されている。「表現」と「みんな」とのあいだの戦いは、今まさに各地で起きている。

本書は、イベント制作者や文化行政担当者など、さまざまな立場で芸術活動を自ら行なったり芸術活動をサポートしていたりする人々を対象に、その実践の過程でどうすればい

が安らぎ、技が磨かれ、体のバランスを保てるのか——ある種人間の根源的な部分を、法律、まちづくり、医療、宗教、音響といった多分野にわたるスペシャリストにインタビューし、そうした活動のベースを支える「提言書」としてまとめたものである。読み進めていくうちに、表現活動における管理や規制といったものが一方的に立ち向かうべき敵ではないこともわかっていただけるように思う。その獲得のプロセスとしても、この取材は自分にとっても眼から鱗の体験の連続だった。

音を鳴らして混ざり合うために——心・技・体を整え、チューニングをし、世界があっと驚く「OUR MUSIC」を、ここ東京で、思いっきり奏でたい。いや、ともに、奏でましょう。

いざ、開演！

清宮陵一

(VINYL SOYUZ LLC代表／NPO法人トッピングイースト理事長)

「隅田川怒涛」

ウェブサイト | <http://dotou.tokyo/>

チューニング——清宮陵一	4
公共空間×法律——齋藤貴弘(弁護士)	10
公共空間×まちづくり——飯石藍(公共空間プロデューサー)	20
公共空間×宗教——近江正典(僧侶)	30
公共空間×医療——稲葉俊郎(医師)	42
公共空間×音響——ZAK(サウンドエンジニア)	54

「どんな未来を
つくるべきか」という
“そもそも”の視点で、
ルールや仕組みを
改善していく。

—— 齋藤貴弘 (弁護士)

さいとう・たかひろ

1976年東京都生まれ。大学卒業後、2004年に司法試験合格。札幌での実務修習、栄枝総合法律事務所での勤務を経て、2013年に六本木・齋藤法律事務所を開設。2016年に弁護士の伊藤弘好氏と共にニューポート法律事務所を開設する。2019年、弁護士法人ニューポート法律事務所パートナー弁護士に。同年、ナイトタイム政策の民間実装のために一般社団法人ナイトタイムエコノミー推進協議会を設立し、観光庁によるナイトタイム事業を支援している。



2010年、大阪のクラブが一斉摘発されたことによって、「踊れる場所」としてのクラブカルチャーを守るための署名活動「Let's DANCE」が立ち上がった。坂本龍一さん、大友良英さん、いとうせいこうさんといった音楽家・文化人と市民とが一体となり、15万筆以上の署名が集まった。国会議員も巻き込んだその成果は、2016年の「風営法」の改正に結実。従来の法律では禁止されていた深夜12時以降のダンスが、一定の条件を満たせば可能となる、画期的な改正だった。

この署名活動や法改正の動きで中心的な役割を担ったのが、「Let's DANCE 署名推進委員会」の共同代表で、弁護士齋藤貴弘さんだ。東京都江東区出身。10代の頃はハードコアパンクバンドを組んでプロを目指していたという生粋の音楽好きであり、弁護士になったあともライブやイベントに足を運び続け、音楽仲間の相談を受けてきた。先の一斉摘発の際、クラブ関係者に声をかけられ、署名活動に参加。その後、風営法の改正に向けて乗り出したのも、法律という「フレームワーク」を整えるのは音楽家ではなく自分の仕事、との思いがあったからだ話す。

そもそも旧風営法には曖昧な点が多かった。齋藤さんはその問題点を整理し、議員や警察といった立場の人にも共感してもらえるロジックを組み立てて彼らを説得した。現在は、この改正を機に生まれた「ナイトタイムエコノミー」（夜の経済活動）という概念を推進すべく、モデル事業の開発や調査レポートの作成に携わり、観光庁に提言している。“営み

の場所”を多様性へと開いていくために、法律は、観光は、どんなふうに関わっているのだろうか？

都内7区にまたがって行なわれる「隅田川怒涛」には、川沿いの場所を新たな活用へ開くという側面もある。場を管理する行政側にも当然、「ふだん使われていない場を開きたい」という思いはあるが、同時に面倒を避けようとする傾向があるのも事実。そんななか、齋藤さんが関わってきた署名活動「Let's DANCE」や、結果としての風営法の改正は、摘発によって閉じられつつあったクラブという場をふたたび開いていく試みだった。活動はどのように始まったのだろうか？

相手の立場で説得のロジックをつくった

「2010年に、大阪でクラブの一斉摘発がありました。その際ある媒体から取材を受けたのですが、そこで話した内容に対して、クラブ業界から多くの批判があったんです。というのも、従来の業界では旧風営法が実質的に深夜のダンスを禁じていることが広く知られておらず、むしろ一種のタブーとしてあえてグレーにされてきたからです。『そんなことをやぶ蛇に語るな』というわけですね。けれど記事を見たある方から声をかけられて始まったのが、1年間で10万の署名を集め

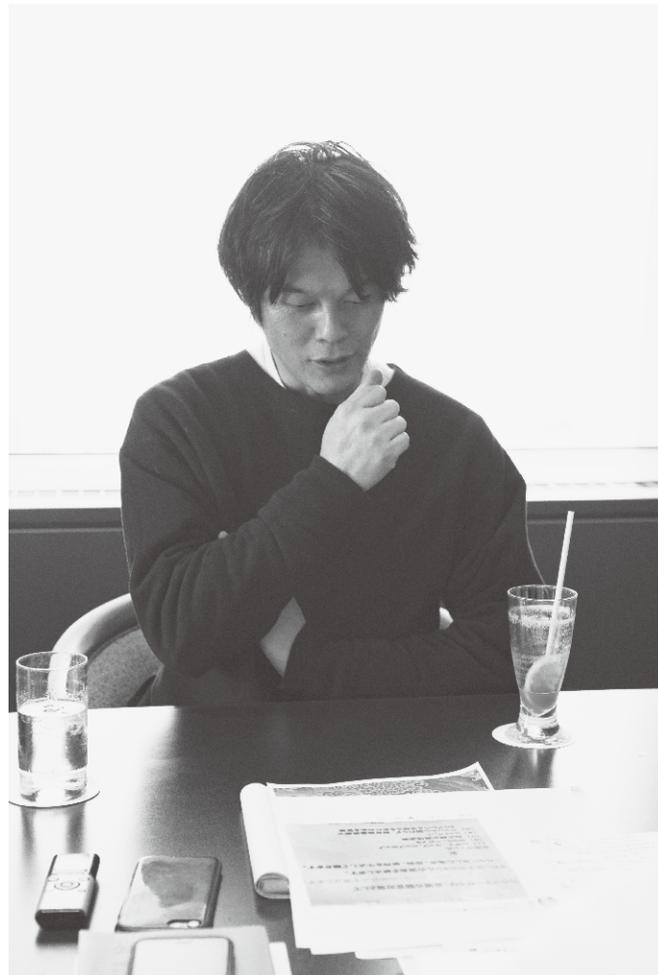
ることを目標にした『Let's DANCE』です。音楽家の坂本龍一さんや大友良英さんたちからも賛同いただき、結果15万筆以上が集まりました」

この署名活動と並行し、齋藤さんは国会議員に「ダンス議連」の設立を呼びかけ、法改正に向けた議論を多分野の人たちとともに展開。集まった署名を議連に手渡した。こうした活動は初めてだったが、その「説得」のプロセスは普段の裁判と同じだと感じていた。

「署名は、『ダンスを守れ!』というシンプルな文言でも集まります。でもそれを議員や警察に訴えても伝わらない。しかし一方で、法的なグレー状態に置かれているクラブ事業者は店舗でトラブルが起きても警察に協力を求めることができません。であれば、警察の仕事は『安心・安全』を守ることなのだから、『安心・安全を守るためにこそ、曖昧な法律は変えませんか?』という説得のロジックで協議していったのです」

その変化はどんな未来に向けたものなのか？

齋藤さんは法改正をさらに後押ししようと、この頃、国会で「夜の時間」の活用が叫ばれていることにも着目した。



「法を変えれば、そこにいろんなメリットがあることを伝えました。通常、法改正はロビー活動が中心で、資金やネットワークのある団体によるものが強かった。けれど、この風営法改正では、世論の支えをベースに、『そもそもどんな未来をつくっていきべきなのか?』という議論を起こして人を巻き込んでいった点に意味があったと思います」

権益ベースで「変えろ!」と迫るのではなく、その変化がどんな未来へ向けたものなのか、社会のグランドデザインを具体的に探っていくこと。そんなポジティブなアプローチは、風営法改正を機に生まれた、夜の時間(18時~6時)の経済的な価値を問い直すための言葉「ナイトタイムエコノミー」にもつながっている。齋藤さんは現在、議員による「ナイトタイムエコノミー推進協議会」とも関わりつつ、深夜帯の活用推進に向けたモデル事業や調査活動などを展開し、その成果を観光庁に提言している。

「その調査では『クリエイティブ・フット・プリント(CFP)』というリサーチ手法を取り入れました。ナイトライフに関するコンサルティング会社とペンシルバニア大学が共同開発した、音楽が都市に与える影響を数値化する手法で、2017年にベルリン、2018年にニューヨークで実施されました。その『東京版』が今回の調査です。そこで何が見えてきたのか? CFPの指標のひとつは、ミュージック・ベニュー(音楽施設)

が街に与える価値です。東京は総合点では3位。しかし内訳を見ると、コンテンツの創造性や実験性では他都市を上回ってはいるものの、表現場所や表現環境のスコアが低く足を引っ張っている。たとえばヨーロッパには工場の跡地を利用した自由で多機能な施設が多くあるけれど、東京にはない。東京の都市開発は収益最大化を命題とする不動産開発の論理で進められがちで、それだと街はつまらなくなってしまう。そこで力を持つのが『文化』なんです」

文化の価値を外からの視点で再発見する

さまざまな立場の人たちの主張に耳を開き、その人たちのあいだに自ら立つことで現実を変えていく齋藤さんの手法は一貫している。「隅田川怒涛」も直面するだろう、公共空間における表現への規制強化といった問題についても、相手との交渉や説得こそが重要だと語る。

「規制の一律強化はたしかに危ないことですが、『もっと寛容な街をつくろう』と唱えるだけでは現実は変わらないと思っています。風営法についても、クラブ自らが『不良の溜まり場』や『ドラッグの温床』といったステレオタイプから脱していないことが問題でした。だからといって、『クラブは健全だ』と言っても問題の本質は捉えていない。一般には理

解できないものや領域がある。それが『文化』の最大の存在意義だと僕は思うんですが、それを地道に伝えていく方法を探るべきではないでしょうか」

そうした文化の意義を広く共有していくには「観光」、つまり、外部からの視点が欠かせないと言う。特定の共同体のみに属する「村人」でも、いかなる共同体にも属さない「旅人」でもなく、ある共同体に属しつつ、ときに別の共同体をも訪れる「観光客」のあり方に、分断された社会における新たな情感と連帯の可能性を見ようとした東浩紀著『観光客の哲学』も思い起こされる。

「たとえば、日本のアニメ作品が有色人種の外国人を惹きつけるのは、それが正義のヒーローを求める西洋型の勧善懲悪の物語とは異なるものだからです。つまり、『ダメなやつでもいいんだ』という価値の転換が魅力になっている。日本製の音楽機器にDJ機材としての活用の途を見つけたのも、海外の人たちだった。国内には見えにくい文化的価値を、国外からの視点を通じて再発見すること。これこそ観光の力です。法律の改正にせよ、深夜帯活用や観光の推進にせよ、文化や表現をめぐるフレームワークをいかに設計し直していくか。『ジャズ不毛の地』と言われたロンドンで近年面白いジャズシーンが生まれているのも、同地に『Tomorrow's Warriors』というジャズスクールができたことが大きいんで

す。そうした裏側の仕組みをつくるのが、文化育成にとって重要だと思います」

最後にあらためて聞いてみる。公共空間を営みの場所として取り戻すには、どうすればいいのだろうか？

「法規制と自主規制は裏腹です。たとえば騒音などのトラブルを自分たちで防ぐことができなければ、法規制につながっていく。まず前提として、自分たちの責任で他の利害関係者と調整を試みるというのが必要になると思います。他方で、ほとんど言いがかりに近いクレームがあるのも事実だと思うので、利害調整を、データベース、ファクトベースで客観化するということも重要でしょう。騒音トラブルがあるととっても、実際にはごく一部の人の感情的なクレームにすぎないということは往々にしてある。そのような個人的な感情に公共スペースの活用が妨げられるのはよくない。また単純にその人に問題があるというケースもあると思いますが、ちょっとしたコミュニケーション不足というだけの場合もあるでしょう。ルールで画一的に決めるだけではない、関係者との関係構築、合意形成が大切だと思います」

公共空間

×

まちづくり

→

OUR MUSIC

「トライアル」によって 何が起こるのかを 可視化してみて、 その風景を共通言語に 空間を共につくっていく。

—— 飯石藍 (公共空間プロデューサー)

いいし・あい

公共R不動産コーディネーター／株式会社nest取締役。1982年生まれ。遊休化した公共施設・公共空間の活用・マッチングメディア「公共R不動産」に立ち上げから参画し、現在は自治体からの公共空間活用に関する相談・企画・コーディネートも実施。また、まちづくり会社「nest」の取締役として、地元豊島区の公園「南池袋公園・グリーン大通り」の企画・事業推進など、エリア価値を上げていくための公共空間活用プロジェクトを推進している。共著書に『公共R不動産のプロジェクトスタディ』(学芸出版社、2018年)。



「公共空間を営みの場所として取り戻す」ときに具体的な課題となるのが、行政をはじめとした場の管理者と使い手との信頼関係の構築だ。街角や公園といった場所を注意事項でガチガチに縛るのではなく、誰もが自由に、楽しく使える寛容な空間としていくために、私たちはその管理者と何を共有すべきなのか。行政と民間の仲介役としてさまざまな活動をしてきた飯石藍さんは、この分野の専門家と言える人だ。

北海道札幌市出身。大学卒業後、自治体を対象とするコンサルティング会社や企業の社会活動などを支援する会社に勤務し、2013年に独立。現在は、自身も立ち上げに関わったメディア「公共R不動産」のコーディネーターを務めるとともに、「nest」という会社の取締役として、JR池袋駅近くの南池袋公園・グリーン大通りを舞台にしたイベントの企画やエリアマネジメントにも携わっている。公共R不動産は、使い途がなくなった、あるいは使われなくなる可能性のある公共施設(旧庁舎や廃校、図書館など)の情報を収集・開示し、民間の利用を募るサービス。一方の南池袋公園は、都会のご真ん中にありながら住民が心地良く集まれる新しい公園として、まちづくりや都市開発の分野から注目されてきた。いずれの活動でも、利用者を主体とした「トライアル」(実験的な試み)の積み重ねによって場を開くことを大切にしてきたと語る。

公共空間の使用に関して、その場所を自分なりに使いたい一般の市民と、ときにそこに規制を加える管理者の立場は、多くの場合、対立図式として捉えられがちだ。しかし飯石さ

んは海外の事例なども引きながら、利用者が管理者にポジティブなフィードバックを行なうことの重要性を訴える。管理者にも自分たちと同じく感情がある。そんな当たり前の事実を理解したとき、一見対立的な構図のあいだに、協働のための「風穴」が見えてくる。

大学ではジャーナリズムを専攻し、もともと「情報がどう人に伝わり、人を動かすか」に関心があったという飯石さん。「誰もが幸せな状態はどうすればつくれるのか」といった公共的な問題にも興味があって、行政のコンサルティングや、企業の社会活動の支援などに携わってきた。そんな飯石さんのキャリアを大きく変えたのが、リノベーションなどの新しい視点で空き物件を紹介するサイト「東京R不動産」の活動で知られる建築家・馬場正尊さんとの出会いだ。活用できるのに埋もれた物件の可能性は、都市のアパートなどだけでなく、行政機関が管理する学校や公園などにもあると感じた2人は意気投合。2015年、サイト「公共R不動産」を立ち上げる。

まずは「実験」して何が起こるか可視化してみる

「コンサルの仕事を通じて、行政の人たちの考え方はある程度理解していましたし、その後に勤めたベンチャー企業では、

起業家や市民活動の方と多く関わるなかで、市民側の行政に対する要望も感じていた。公共R不動産は、いわばその2つを組み合わせた試みのひとつです。たとえば一個人が公園を音楽イベントに使いたいと思っても、その声を伝えるだけでは自治体は動けない。自治体サイドには、『一度きりではなく、その場をできるだけ長く利用してもらって管理維持費を長期的に減らしたい』という課題があるからで、事業やイベントの採択には慎重になる。それが利用者である一般の人にとっては、申請に必要とされる手続きの膨大さというかたちで負担になり、ますます使いたい場所がなかなか使えないことに戸惑ってしまうというギャップがあった。そのあいだを埋めたいという思いが、公共R不動産の原点にあります」

そこで目指したのは、公共空間の活用法をとにかく楽しく、自治体の公園管理や施設管理部署の担当者にもイメージできるように「見える化」すること。活用したい場所の情報を自治体から提供してもらった公共R不動産は、自分たちの視点でその価値を伝える記事を作成。サイトに公開して新たな使い手への情報提供を進めるとともに、より良い活用に向けてのコンサルティングも行なってきた。最近の事例だと、2019年に「グッドデザイン賞」を受賞した福島県の「須賀川市民交流センターtette」がある。イベントホールやキッチン、ラジオスタジオまで備え、生涯学習や子育て支援の場としても地域に広く開かれている。

「行政は場所の活用はしたいけど、どんなふうに使われるのか、どんな人が使うのか、そしてその結果もイメージできないから検討議題に挙げにくい場合も多い。そこで重要なのは、管理側のプレイヤーを巻き込んだ具体的な『トライアル』の機会をつくること。ポイントはそれが『できるかどうかも含めてまずは試してみる実験』であって、事業の本番ではないことです。海外では2000年頃から、社会実験を経て公共の場の次のあり方を探る潮流が生まれました。たとえば2009年、ニューヨークのタイムズスクエアでは半年間にわたって車道を止め、歩行者天国にする試みを実施。そこで交通問題もクリアし、周囲の店の売上も上がったことから、現在は恒久的に広場として利用されています」

場所を「顔が見える」状態にしておく

そういった問題意識から、自治体が空間を使う事業者をいきなり募集するのではなく、ワークショップやイベントなどを通してまずは実験的に使い方を試してもらう期間を設ける仕組みを「トライアル・サウンディング」と名付けて公共R不動産の本で提案したところ、実際にやってみたいという自治体が現れた。2019年11月、茨城県常総市の「水海道あすなろの里」という12.1ヘクタールもの広大な敷地で、その場所の可能性を探ろうとする国内初の「トライアル・サウンディ

ング」の試みを実施。自然の中で書籍と触れ合い音楽を奏でるキャンプイベントが開催されたりと、公共空間の可能性を探ることができた。

「試着でも化粧品サンプルでもそうですが、『まずは試しに！』と言えば、『そうか、やってみようかな……』ってなるでしょう？(笑) プロセスにしても結果にしても『見えない』ことによる管理側の不安や恐怖を、実際の現実の風景を通して解きほぐし、『こんな面白いことができるんだ』『もっとこうしたらいいのかも』と、新しい楽しさを『見せる』ことが大切だと思います。トライアルで風穴を開け、行政にも、地元の人にも、事業を受け入れやすい土壌を耕していくんです」

行政と民間、民間と地元、それらをつなぐ「緩衝帯」のような実験を通して、場所のあり方や関わる人たちの思考を柔らかく変えていくこうした活動を飯石さんは、「正しくゲリラを仕組む」とも表現する。でもすべての「ゲリラ」が成功するわけではないだろう。飯石さんは、2016年にリニューアル・オープンした南池袋公園とその近くのグリーン大通りという道路を活用したイベント企画などにも携わっている。都市の中心部にある公園ながら、マルシェやヨガ教室、さらには結婚式やコンサートといったイベントも開かれている。そのなかでクレームや反発を受けたことはないのだろうか？

「南池袋公園ではマルシェなどのイベント中にジャズ演奏をしてもらっているのですが、『うるさくて仕事にならない』というクレームが来ることがあります。騒音規制法では屋外での『騒音』を1mの距離で『70dB以上』(70dBは高速道路を走行中の車内の音などに相当)と定めている。たしかに境界線上ですが、音の大きさは測り方によって大きく変わるものです。そうした曖昧な部分を先回りして規制したら、できないことがどんどん増えてしまう。とはいえ、クレームにどう備えておくのか。その場所を『顔が見える』場にしておくこともひとつの解決策かなと思っています。たとえば、『問題があったら、この人に伝えてください』という個人を明確にしておく。『私に言ってください』と言うと、クレームを言う人も苦情を言わなくなる傾向がある。空間に人格があることで、関係性がオープンになるんですね」

ポジティブな反応こそ伝えるチャンネルを

行政担当者も「組織の人」として管理するよりは個人的な側面をもっと押し出したほうがいいのではないのでしょうか、と飯石さんは続ける。そのような積極的な行政の協力を引き出すためには、利用する側も普段からその場所の価値を可視化して行政に伝えることが大事だという。

「サイレントマジョリティの声をいかに届けるか。その場所を『いい』と感じている人は、わざわざそれを伝えませんよね。海外では公園ごとにFacebookなどのSNSアカウントを設けるケースがあって、投稿に対する『いいね!』の数でグッドニュースを管理側に届けることができます。また、公共空間の評価調査は往々にして来園者数といった定量的な指標がベースですが、本来『いい空間』って、『居続けたい』とか『いろんなことができる』とか、もっと個人的な感覚や感情に基づく行動で現れてくるんです。1人あたりの滞在時間や、その空間で起きているアクティビティを計測した『アクティビティ調査』という手法が注目されていて、それで調査すると『親子連れが幸せそうに過ごしているのを見て心が癒された』といった、数では捉えにくい感情を具体的な情景と数値として拾い上げられます。その調査結果を管理者に示すことは、場の維持に対する感謝を伝えることであると同時に、管理側の当事者意識を育むことにもつながりますよね」

場の管理者にも、人がよろこぶ何かをしたいという思いがある。あらためて見えるのは、そんな当たり前とも言える現実だ。日本で「公共」と言えば、「みんなで作るもの」ではなく、自治体や国から「与えられるもの」というイメージも強い。どうすればその認識をボトムアップに更新できるだろうか。

「音楽が中心の『隅田川怒涛』でいえば、『オーケストラ』の

ような状態をどうつくるのか。結局、行政だけでは公共空間はつくれぬ。かといって民間だけだと収集がつかなくなってしまう。お互いを補って、ひとつの音楽を奏でるみたいなのができればいいんだと思います。そのためには、お互いの発している音をよく聴くことが本当に大事だと思う。声になっていない声、音になっていない音がまだたくさんある。その意味では、行政の人たちが管轄部署を超えて思わず人に共有したくなるようなイメージを私たち市民が描けるのか、ということも試されています。ネガティブな連鎖ではなく、『楽しさ』に基づく連鎖が起きる社会になればいいですね」

そんなふうにして、公共空間をポジティブな営みの場所として取り戻していくには、何から始めればいいのか？

「何が起こるのかわからないこと、まだ見たことのないものに対して、人は不安を覚えます。公共空間も同じで、行政は予期せぬ動きに対して制御をかけて禁止事項を増やしてしまう。こと音楽については、ひとくりに『騒音』とみなされて演奏ができない場所も多く存在しています。その状況を打破するには、まずは目指す風景を実験的に作り、そこで起きていることを関係者全員で共有していくことから始めてみるのが効果的です。いきなり大きく動かそうとせず、まずは試してみる。行政も民間も、その姿勢で空間づくりを楽しみながら進めていけると、面白い空間に育っていくと考えています」

相手の心の来歴を知り、
自分との関係性の
“いま”を把握しながら
当事者へと
巻き込んでいく。

—— 近江正典 (僧侶)

おうみ・しょうてん

法明寺住職。1956年千葉県生まれ。立正大学仏教学部宗教学科を卒業後、1980年に日蓮宗新聞社に入社し編集部勤務。1985年、豊島区南池袋にある日蓮宗の寺院「法明寺」の執事に就任し、2008年に同寺の住職となる。2014年、学校法人身延山学園評議員に就任。2017年より豊島区観光協会の会長も務める。



JR池袋駅のほど近くにありながら、昔ながらの暮らしの気配がいまも残る豊島区・雑司が谷。この街に、一風変わったコミュニティ活動を展開する僧侶がいる。飛地境内にある鬼子母神堂でも知られる日蓮宗のお寺、法明寺の住職・近江正典さんである。

2019年、都市間交流を目的に日・中・韓で開催されてきた文化庁のイベント「東アジア文化都市」の一環として、雑司が谷で「Oeshiki Project ツアーパフォーマンス《BEAT》」が開催された。「御会式」とは、日蓮聖人の命日である10月13日を中心に行なわれる法会で、華やかな万灯とともに数千人が太鼓を叩きつつ街を練り歩く「祭り」のような熱気が毎年、江戸時代から続いている。その開催に合わせた同プロジェクトは、劇作家の石神夏希さんが関わりながら、街に住む多国籍の住民たちを叩き手に迎えた、「もうひとつの御会式」とも呼べるものだった。このOeshiki Projectを主導したのが、豊島区観光協会の会長でもある近江さんだ。

千葉県勝浦市生まれ。大学卒業後、日蓮宗布教研修所を経て、同宗の発行する新聞の編集にも携わった近江さんは、周囲の人に導かれるように法明寺の住職に。以降、檀家さんだけでなく、お寺に親しみをもち地元住民や、雑司が谷に21組ある「講社」との関わりを大切に、御会式の伝統を時代に合わせて更新してきた。地域コミュニティが失われる現代、年に一度の祭りの存在は街の人たちの暮らしに「メリハリ」をもたらし、練り歩きの大きな音にも苦情の少ない磁場を築

いてきたという。

ある表現活動に批判的な意見を持つ人を「無理解だ」と遠ざけることは、たやすい。けれど近江さんは、「四苦八苦」や「順縁」「逆縁」といった仏教的な教えを軸に、一見相入れない人たちの立場や考えを咀嚼してみるものの可能性を説いてくれる。制度や法律のようなシステムだけでは解決できない、表現に対する寛容さを切り拓く「心」の問題を、近江さんに聞いた。

文化イベントではよく題目にされるが、多様な参加者が形式を超えて混じり合うことは、案外難しい。ましてや、確固たる型が存在し、催しとその担い手と観客とに分かれがちな地域の伝統行事なら、なおさらだ。そんな通説とは反対に、2019年に本家の御会式と並行して行なわれた「Oeshiki Project」では、さまざまな国籍の参加者が地元住民のあいだに分け入って遠慮のない関係性を結んでいた。その結び目になったものとは、いったい何だろう？

21もの地域ユニットがルールを編んでいく

「その背景には、私たちが普段から地域と積み重ねてきた信頼関係があると思います。御会式の開催に地域との連携は必

須。地元の人たちはいまま法明寺を『オヤマ』と呼んで親しんでくれており、その信頼を損ねないように御会式も毎年改良してきました。特徴的なのは、雑司が谷には21組もの『講社』があることです。伝統的には在家集団のサークルのようなもので、地域の相互扶助的なコミュニティ。それが講社です。富士山を信仰する『富士講』などが有名ですね。雑司が谷ではありがたいことに、住民主体の御会式運営が戦後も連続と続いていて、ポイントは講社が複数あることです。基本単位は地域ですが、人間関係によって組み替え可能な、柔軟性のあるコミュニティ(地域組織)なんですよ」

御会式の土台を支える講社が複数あるからこそ、「あっちに迷惑をかけてはいけない」といったルールが自然に発生して秩序も生まれる。しかもそれは時間の層に積み重なっていく。こうして祭礼は「ルールがあること」を学ぶ格好の場となる。

「現代社会では、共通のタブーがなくなったでしょう？ タブーを犯すことは共同体に迷惑をかけることだから、都市化で共同体が失われるとタブーも消えていく。これは一見、自由への道にも見えますが、じつは不自由なんです。以前はタブーさえ犯さなければ逆に何をやってもよかった。けれどそれがなくなると、個人ごとに違う基準や規律が浮上ってきて、わかり合うことが難しくなる。だから講社のような地域ユニットがある重要性とは、個人の尺度による規範を一度捨てて、

ルールを共有する機会がそこに生まれることなのです」

当事者に巻き込むのが最大のクレーム対策

祭礼に付随する一つひとつの作法もルールを反映するが、それは公園の禁止書きのように行為を閉じるものではない。むしろ、その祭りを大事に思う価値観や、行事を基点にした時間の感覚が作法を通じてコミュニティに浸透していく。そして、「この場所は私たちの場所だ」という安心感が、年に一度の「ハレ」の空間を広げているという。

「祭礼とはそもそも、日常＝『ケ』の鬱憤を発散する非日常＝『ハレ』の場。でも、いまはハレとケの区別が曖昧になっていますよね。そんな状態を『メリハリがない』と言います。雑司が谷の人たちは、御会式があることで1年間の生活のリズムを持っていて、だからこそハレの場では、普段はできないちょっとした逸脱も安心してできる。太鼓を叩くこと自体の魅力もありますね。太鼓の音はある種、私たちの遺伝子に刻まれたもので、叩きながら一緒に歩いていると、音と一緒に道中で心も合ってくるんです」

しかし渋谷のハロウィンがそうであるように、現代の「ハレ」の場では、クレームによって警察が増強されて、動ける場所

も次第に制限されていく。御会式の場合、身内ではない外部からの声や規制にはどう向き合ってきたのだろうか？

「前回の東京オリンピック以降、警察による道路規制が強化されて、路上が舞台の祭りの多くがなくなってしまいました。でも、祭礼のない地域のほうが少年犯罪が多いという調査もある。だから警察には、祭りを潰すのではなく安全にコントロールするほうが大事で、そうすれば結果的に治安が守られると伝えたんです。それからは逆に協力してもらえて、現在では御会式の各群に警官が1人付いています。クレームはそもそも地元内から出ることがない。あるとすれば、参加したいのにできない、妬みを持つ外部の人の意見かな。その意味で、最大のクレーム対策とは当事者にしてしまうことです」

けれど「よそ者」がそう簡単に当事者になれるだろうか？「Oeshiki Project」を率いた劇作家の石神夏希さんも、いわば「よそ者」だった。が、聞くと彼女は2年ほど雑司が谷のあらゆる行事に参加して、住民と交流し、地域にどっぷり浸かったという。

「そうすれば地元も『あんたがそこまで言うんだったら』と、“身内ごと”として協力するんです。大義名分があっても、身内と感じなければ人はなかなか動かない。単発の行事でもそうしたコミュニティとの関係性を持ったほうがいいでしょ

うね。『隅田川怒涛』なら、関係する7区すべてにそういう『お客さん』じゃない当事者がいることが大事。『怒涛』というのは立場も何も関係なくごちゃ混ぜになった状態でしょう？文字どおり、あらゆる人を当事者に巻き込んでいったらいい」

「逆縁」で結ばれた人にもその人なりの理由がある

しかしクレームはともかく、外からであれ内からであれ、「無理解」には直面するだろう。その声の主を単純に「理解のない人」と突き放すのではなく、ある種の「縁^{えん}」を持った人として接し、彼や彼女の心のあり方に思いを向けることが大事だと近江さんは話す。その手立てとなるのが、仏教のさまざまな考え方だ。

「人間の性格は本来的に自分本位。自己の物差しで世界を測ります。どんな物事に対してもテーゼ（正の反応）とアンチテーゼ（負の反応）は生まれ、これを仏教ではそれぞれ『順縁』『逆縁』と呼ぶんです。仏教が面白いのは、そのリアクションが『順』でも『逆』でも、『結縁』と言って“縁が結ばれた”と捉えること。つまり、文句を言う人だって、因果を基礎にした仏教の世界では、物事の起点となる原因をつくった『縁（関係性）のあった人』なんです。『逆縁』で“結ばれた”人にも、その人なりの由来や状況がある。その理解を助けてくれ

るのが、『四苦八苦』の考え方です」

「四苦八苦」はもともと、人間の苦しみの分類法だ。まず、「生老病死」の四苦。「生」が含まれるのは意外だが、これは「生」がその後の「老病死」すべての起点だから。そこに、愛しい存在と別れる「哀別離苦」、憎い人に会う「怨憎会苦」、求めるものが得られない「求不得苦」、身体に宿る煩惱によって引き起こされる「五蘊盛苦」という、四つの苦しみが加わる。

相手と自分、心の現在地を知る

「たとえば、あるプロジェクトに反対する人がいたとして、その人には後者の四苦に由来するどんな執着があるんだろう？と考えること。そうやって、逆縁(負の関係性)の原因や理由をもし明らかにできれば、関係性を築く(順縁化する)ことは難しくても、軋轢を和らげる方法を探ることはできるはず。仏教ではさらに、常に移り変わる人間の心がありようを『餓鬼』『畜生』『修羅』『人間』『仏』など、今風に言えば10個のフォルダに整理した『十界』の考え方もあります。相手の心はいま怒りにあるのか、平穏なのか、この10のマインドセットを手元に置けば、相手のみならず自分の心の状態を知るうえでも役立ちますよ。相手が、自分が、いま

どの現在地にいるのかを把握することが大事。目の前の一面性に捉われず、その奥の実相を考えてみることで」

相手との関係性や人の心を理解するためのツールと捉え直した途端、疎遠に思えた仏教用語がまったく違うものに見える。「無常」(常なる変化)という言葉にだって、なにか、人間の可塑性への信頼が滲んでいるようにも感じられてくるから不思議だ。世界が、人が、どのようなものであるかは、自分の心を映し出している。

『『大きな音』『騒音』』というのも、結局はイメージです。自分の好きな音は大きくても気にならないし、嫌いな音だと小さくても気に障る。物事に満場一致はありえない。でも、7割くらいの人が賛同してくれるなら成功でしょう。『公共の福祉』という言葉がありますが、多くの人たちと関わり、その理解を得ながら準備されたイベントならば、『公共の福祉』はすでに生まれていると考えることもできる。このプロセスを反故にし、それに一方的に反対するのは、一種のエゴ。声の大きな少数派の意見を軽視するのはよくありませんが、同時に、それに惑わされすぎないことも大事でしょう」

地獄
餓鬼
畜生
修羅
人間
天上
聲聞
緣覺
菩薩
仁

子どもの頃の 音の原体験の中に 「よりよく生きる」ための 対話の接点を 見つけ出していく。

—— 稲葉俊郎 (医師)

いなば・としろう

1979年熊本生まれ。医師、医学博士、東京大学医学部付属病院循環器内科助教(2014～2020年)。2020年4月より軽井沢病院総合診療科医長。信州大学社会基盤研究所特任准教授、東京大学先端科学技術研究センター客員研究員、東北芸術工科大学客員教授を兼任(「山形ビエンナーレ2020」芸術監督に就任)。在宅医療、山岳医療にも従事。未来の医療と社会の創発のため、あらゆる分野との接点を探る対話を積極的に行っている。単著に『いのちを呼びさますもの』(アノニマ・スタジオ)、『ころころするからだ』(春秋社)、『からだところの健康学』(NHK出版)など。<https://www.toshiroinaba.com/>



循環器内科の名医として東京大学医学部付属病院で活動し、今春から軽井沢病院と信州大学社会基盤研究所に籍を移した稲葉俊郎さんは、医師でありながら、音楽からアートまでさまざまな表現活動にコミットしてきた“異端の人”だ。UAさんや大友良英さんといった音楽家との共同作業でも知られ、「隅田川怒涛」ではアポリジニの伝統楽器ディジュリドゥ奏者のGOMAさんとトークやワークショップで共演する。日頃から絵画も描き、今秋に山形県で開催予定の「みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ2020」では、医療分野から異例の芸術監督に選ばれた。

熊本県熊本市出身。幼い頃は身体が弱く、そこで人に介抱された経験から抱いた「誰かが困っている問題を解決したい」との思いが、医師を目指した原点だと語る。科学的な根拠を重視する西洋医学が常識とされる日本の医学界。そのなかで見過ごされがちだった伝統医療や民間療法にも目を向け、「病を治す」よりも根本的な「よりよく生きる」ことに通じる表現活動の可能性を独自に模索してきた。病院を中心とした従来の医療の再定義を目指し、移住先の軽井沢では街全体を巻き込んだ新しい実践に取り組もうとしている。

そもそも人間にとって「聴覚」という感覚とは、音楽に触れる体験とは、どんな意味を持つものだろうか。「快／不快」の根拠は何なのだろうか？ そんな根源的な疑問にも丁寧に答える稲葉さんは、不快なノイズが音楽となって対話のきっかけになる可能性についても触れる。「個」と「場」の緊張関

係の中で、ふたたび生き生きとした生を取り戻すための、ホリスティックな術を語る。

待ち合わせた東大前の喫茶店に、稲葉さんはロードバイクに乗って現れた。ハンチング帽にイッセイミヤケの服……と一目でアートが好きだとわかる佇まいは、医師という堅い職業から想起されるイメージとは馴染まない。循環器、とくに心臓カテーテル治療の名手として知られるようになった現在も、権威的な意味をまとわせる白衣は性に合わないようだ。そんな型破りな医師としての稲葉さんの原点には、身体の弱かった幼少期の体験がある。

音楽もアートも、すべて医療的な行為

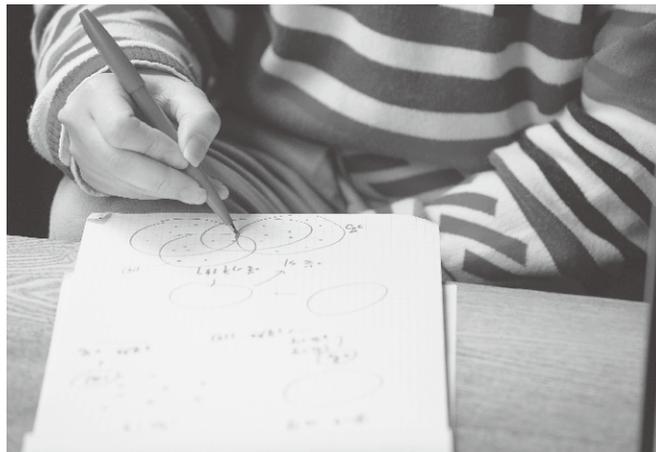
「小学校に入るまでは不食のようにご飯を食べない子だったようで、入退院を繰り返していた子ども時代でした。人って、弱っているときに介抱されるとうれしいもので、自分は人一倍その気持ちを感じてきたんですね。職業として医者を選んだのも、『人が困っている問題を解決したい』からで、僕の大きな関心は、人が『よりよく生きる』とは何か」ということなんです。その模索の一部に、医師の活動がある。病院というのは『病の院』と書くわけですが、僕はもっと包括的な『健

康』について考えたくて、病院外の芸術活動にも積極的に関わってきました」

人が「健康」であるということが、身体的な病=マイナス部分を治すことに限らない、精神や社会的な状況も含むより広範囲の要因を持つことは、近年注目される「ウェルビーイング」という言葉の登場でも知られ始めた。また、最近ではイギリスを中心に、医師が診療にあたり患者に地域での社会活動の場を紹介する「社会的処方」という考え方も広まりつつある。病院の外に治療の場を開くことの可能性が、いま医療の世界で模索されている。

『『病気』がなくなれば、その人が『健康』であるとは限りません。では、『人がよりよく生きる』ためには何が必要なのか。その文脈で重要な鍵となるのが、芸術や文化だと考えています。だからこそ、僕は音楽からアートまで分野を越境せざるをえないんですね。音楽を聴いたり絵を見たりして感動する経験は、僕にとっては立派な医療的な行為だと言えます。そもそも、『病院』という特定の場に医療行為が閉じ込められたのは近代以降で、それ以前の医療は、いまで言う在宅医療のように、あるいはお寺のような地域の開かれた場所で、もっと大きな視点で行なわれていたと思うんです」

同じことは、文化の側にも言える。たとえば、周囲から切り



離された近代型の美術館や演奏空間が出現する以前、美術や音楽は「作品として純粋に鑑賞される」というより、宗教や祭礼、政治、あるいは人同士のコミュニケーション活動とも密接に結びついていた。インドネシアの楽器演奏「ガムラン」は地域ごとに異なる調律を持つとも言われるが、その合奏には地域のもめ事を解決する役割もあるという。表現はそれが根ざす土地の中で、多面的な意味や機能を担ってきたのだ。

「そうした文脈を踏まえて、僕は医療の再定義をしたいのです。今春から軽井沢に拠点を移したのも、街にただで健康になる場づくり、街づくりに参画するためです。軽井沢は、1972年に制定された『自然保護対策要綱』によって家の塀を生垣にすることが定められているなど、自然・動物目線が息づく街。現代は、近代化の中で細分化されすぎた諸領域の再統合が求められている時代です。今年、芸術監督を務める芸術祭『山形ビエンナーレ2020』でも、音楽やアートの中に医療や睡眠や食を混ぜ合わせて、祭りという営みの可能性を提示したいと思っています」

「場」の倫理の中で「個」を育てていく

さらに稲葉さんは、区画された場を超えて地域の中に医療や表現の活動が染み出すそうしたあり方は、「個」の論理を重

視する西洋に対し、「場」の論理や倫理を重視する日本や東洋にこそ馴染みがいいのではないかと問いかける。

「会社や村という場にはそれぞれ独自の論理があるように、日本では場の安定性を大切に、ときには場を大切にすぎた個がないがしろにされるという土壌があると思うんですね。日本社会では場の平衡状態を保つことが重視されすぎて、場の均衡を乱す個は、問答無用でそこから追い出されてしまうのです。他方、個人の価値観や論理に重きを置く西洋では、個を超えて共通のまとまりをつくるのが難しい課題になる。それぞれの課題は反転状態にあります。そこで自分が目指したいのは、東洋的なまとまりの場の中で、確固とした個の存在を育てるということです。場を大切にしながらも、個が尊重される。場の中で個を消す必要はなく、ちゃんと個を主張できる。個のあり方と場のあり方がほどよい緊張状態にありながら、適切なバランスを保っている。場を大切に、同時に個も大切にされるような、新しい場の創造が必要なのではないでしょうか」

あらゆる立場の人が混じり合いつつも、個人の自由な表現の領域を広げていくことができれば、隅田川という「川」もまさにそういう場になりうるだろう。しかし、ある表現を「不快」と感じる個人の感情が、あるとき「場の論理」と結びつき、その場もろとも表現を一気かつ全面的に禁止に追い込む事態

は昨今珍しくない。そもそも人にとって「快／不快」とはいったい何なのだろう？

「音の場合、『快／不快』は人間の身体にある3つのリズムに関係していると思います。1つ目は『心臓のリズム』です。『心拍(ビート)』ですね。これは内臓のリズムで植物性臓器のリズム。ビートのリズムは、太鼓などの打楽器を含めた、アフリカやブラックミュージックのリズム感につながります。2つ目は『意識のリズム』です。眠ったり起きたりと、『意識』はリズムを持って周期的に変動していて、これは動物性臓器のリズム。3つ目は、この『心臓』(植物性臓器)と『意識』(動物性臓器)のリズムをつなぐ『呼吸のリズム』です。雅楽の笙や尺八、鼓など、呼吸で合わせるリズム感覚は東洋の音楽のベースにあるものです。都市化した現代では電子音楽のような『脳化』した音楽も誕生していますが、身体的な側面から言えば、いま話した『心拍』『意識』『呼吸』のリズムに同期した音を、人は心地良いと感じるのだと思います」

原体験としての「ノイズ」が水路になりうる

本能的に心地良いと感じる音は、身体に結びついている。内臓のリズムを、人間の心から宇宙までを貫く根源的なリズムだと考えた解剖学者の三木成夫が思い起こされるが、そうし

た本来のリズムが人と人とのあいだをつなぐとき、音楽を心地良く感じるのだろう。ではそれに対して、ある人に「ノイズ」だと不快に捉えられてしまう音楽のことは、どう考えたらいいのだろうか。

『「ノイズ」とは、一言で言えば『情報量が多い状態』のこと。その音が何かしらの情報や文脈の積み重なった結果だと知覚できる人にとっては不快ではないけれど、それを感じ取れなければただの雑音や騒音に感じるのでしょうか。たとえば、子どもはまだ『甘い』『辛い』といった単純な味の判別しかできませんが、さまざまな味覚体験を蓄積していけば、フランス料理のような微細で複雑な味わいがわかり、ビールのような雑味も楽しめるようになります。同じように音楽でも、フリージャズのようなジャンルは、それまでのジャズの歴史を踏まえていなければ雑音にしか聞こえませんよね。感覚を拡張していくときには、単純なものから複雑なものへとステップを踏んでいく必要があるのでしょうか」

しかし、そんな「理解できないもの」としての「ノイズ」にこそ、逆説的に、見えないものに対する恐怖を縮減していく可能性が開かれているという。鍵になると稲葉さんが話すのが、子ども時代の経験だ。

「人には誰しも、情報過多でよくわからない『ノイズ』さえ

も心地良く感じた体験があると思うんですね。たとえば、渋谷のスクランブル交差点のような雑踏の中にひとり佇んだときの感覚。遠い場所のラジオを聴きたくて電波のチューニングをしているときに、雑音から少しだけ音楽が立ち現れてくる体験。そうした生の原体験はどんな人にもあるはずで、『わたし／あなたは子どもの頃、どんな音に胸が騒いだんだろう？』と音の体験を思い出すことが、分断化された壁を取り払い、新しく個人と個人とのあいだをつなぐ水路の役割を果たしてくれるのではないのでしょうか」

たとえば広場を使った音楽イベントが地域の理解を得られないとき、住民を集めて「10代の頃に聴いた音楽を聴く会」を開いてみる。どれだけ年齢を重ねても変わらない、そうしたコアな感覚を語り合うことが、分断をつなぐ扉になるのではないかと稲葉さんは問いかける。

「個が生き生きするための場の創造が、これから広く社会で目指していくべきものだと思うんです。その達成のためには、個人を、社会的役割が与えられる以前の原体験や魂のレベルで呼びさますしかない。一見難しいようにも見えますが、音楽には命を呼びさます力があると信じています。そのプロセスでは、フィンランドの精神医療の分野で注目されている『オープンダイアログ』のように、オープンな場で対話を続けていくことも重要でしょう。音楽は場を支えるものとして最

適です。開かれた場で対話のプロセスを共有し、深い場所でのつながりを得た個人と個人とは、心強い『味方』同士にさえなると思います」

最後に、音楽を通してそうした公共のつながりを新たに開こうとしている「隅田川怒涛」のような営みにどんな可能性があるか、尋ねた。

「空き地のように特定の目的がないからこそ、人がそこに独自に『生きる意味』を見いだせる場。そんな場が、新しい公共空間だと思います。音楽に『生きる意味』を見いだす人は、その公共空間の立ち上げに音楽的な体験を通して貢献できる。音楽は国境や宗教、世代を超えてつながることができるもので、新しい公共空間に欠くことができないものだと思います」

その人にとって
本質的なものとは何か、
そのことだけを
目的にして
音楽にも集中していく。

—— ZAK (サウンドエンジニア)

ZAK

PA/レコーディングエンジニア、プロデューサー。FISHMANSの仕事で注目を集めた後、BUFFALO DAUGHTER、BOREDOMS、UA、坂本龍一、FRICTION、原田郁子、相対性理論、やくしまるえつこ、青葉市子、三宅純、水曜日のカンパネラ、長谷川白紙など、多くのアーティストのレコーディングやPAを手掛けている。



「音楽は魔法」——。そんなふうに語るのは、エンジニアとして数々の音楽作品に関わってきたZAKさんだ。音楽産業が巨大なシステムと化し、日々大量の音楽が生み出されては目まぐるしく消費される現代において、ZAKさんの仕事は、一度聴いたら忘れられない際立った個性を放ってきた。レコーディングエンジニア、ライブPA、演劇やパフォーマンス作品の音響と、その活動領域は広いが、音楽ファンであれば、響いてくる音の質感や表情から、それがZAKさんの手によるものだと思える人が少なくないのでは、と思う。

ZAKさんの活動でもとりわけ有名なのは、1995年から1997年にかけて、バンド「FISHMANS」と彼らのプライベートスタジオ「ワイキキビーチ／ハワイスタジオ」で制作した作品群だ。奥行きを感じさせる音響空間、丁寧に^{きめ}つくり込まれた音の肌理、どこか懐かしさを秘めた温もりのあるサウンド……。バンドの魅力を最大限に引き出した、エンジニアとしてのZAKさんの仕事は、まさに「魔法」と呼びたくなるものだった。こうした音のミックス作業では「もっともそのアーティストらしい部分」を増幅することが第一で、結果的に音楽が「いびつ」になってもいいと言う。それは、一般的な常識や情報を疑い、何事も「本質」を見極めようとするZAKさんの日常の視線と一致する。

そうして周りの環境に目を向けると、いまの東京は「余計な音」にあふれていると話す。音だけではない。食べ物でも身に着けるものでも、自然から離れたもの、質の悪いものが、

あたかも必要なもののように喧伝されている。なぜ非本質的なものを「必要」だと感じてしまうのだろう。その幻影は結局、自分の不安や恐れが生み出したものかもしれない。「音楽は何かの道具ではない」と語るZAKさんは、黙々と自分の音楽を制作することで、この世界に別の可能性を提示してきた。

もともと出身地の関西で活動していたZAKさん。27歳で上京し、1990年代以降、FISHMANSをはじめとして日本の音楽シーンを支えてきた。現在は、20年ほど前に東京郊外の静かな住宅地に設立した自身のスタジオ「ST-ROBO」を拠点にしているが、東京は、「やんわりと催眠術にかかっている感じ」だという。東京の音環境にも、強い疑問を持っている。

音楽が「利用」されていることに耐えられない

「東京の街、とくに公共空間には、必要のない音があふれすぎていますよね。自分が以前活動していた大阪にもそうした音はありますが、まだ人間味が感じられる。その点、東京は特殊なほど音が過剰で、ノイジーだと思います。駅ひとつとっても、券売機からホーム、車内にいたるまで、注意を喚起する音が無駄に大きな音量で流れている。そこに音楽が『利用』されていることが最近とくに耐えられないんです。

誰がそこに音楽が必要だと言ったのか。単に『電車が来ます』とアナウンスすればいいだけでしょ？」

東京に限らず、音に限らず、日本が「サービス」過剰な国とは、たびたび指摘される話だ。けれど、音楽はいったい何のために利用されているのだろう？ たえば駅のホームであれば、「その場所を華やかにしたい」という「おもてなし」精神もあるのだろうが、「音が小さくて電車の接近に気づけなかった」といったようなクレームに対する恐れもあるのかもしれない。

「そういう想定を先回りして設定したのも、結局は自分たちですよ？ 勝手に抱いた恐れから、『余計なこと』をしていると感じます。何でもかんでも音にしなくていい。日本人は自分の想定をもとに、いつもやらなくていいことを3つくらいしていると思います。もともと周囲のつくったルールに進んで従う傾向のある国民性で、良くも悪くも真面目だからこそ、過剰に不安に陥ってしまうのではないのでしょうか」

「本質的なもの」は少しでも満足できる

新型コロナウイルスへの対策として政府が急遽発表した小・中・高への休校要請にじつに99%もの公立学校が従ったのも記憶に新しい。もちろん、それが「余計なこと」とは言わな

いが、こうした「上」からの直接的な要請に限らず、普段の生活におけるさまざまな選択の中で、日本人の多くが良くも悪くも周囲の目を気にしているのはたしかだろう。では逆に、「余計でないこと」とは何だろうか？

「いま、みんなが羨ましがったり欲しがったりするものの大半は、本当は必要のないものだと思います。『必要なもの』『本当のもの』というのは、自然の素材でつくられたものや、その土地で伝統的につくられたり食べられたりしてきたもので、企業が大声で宣伝しているようなものではない。日本にはもともと質の高いものがたくさんあって、昔の人はその価値を知っていました。最近のコンビニ食とか、大量生産されたファストファッションの服を見ると、おかしいくらいに安いものがある。質が良くないものは、たくさん摂らないと気が済まないもの。反対に、おいしい食事がそうであるように、質の良いものは少しだけでも満足できるはずですよ」

ZAKさん自身はベジタリアン。ヨガと瞑想を日課にしている。こうした日々の実践や、質の高いものへのこだわりは、生活における単なる趣味嗜好の範囲を超えて、ZAKさんの音楽活動の基盤にもなっているのだろう。

「そこそこのもので満足していると、そこそこのことしかできなくなる。いつの間にかそれ以上のイメージを持つことが

できなくなるんです。もし、なにかこれまでの常識を超える実験的な取り組みを防げるような傾向が今の社会にあるとするなら、それは、人々がより豊かな世界のイメージを持ってなくなっているからかもしれません。べつに『王様のような暮らしをしよう』と言いたいわけではなくて、『本質的なものにちゃんと触れて生きよう』ということだと思います」

「ニュートラル」とは「正しい位置にあること」

以前、ZAKさんのスタジオ「ST-ROBO」で音源のミックス作業(さまざまな音色や音量をひとつの音楽にまとめる作業)のポイントについて話を聞いたとき、印象的な発言があった。「ミックスは、全体をきれいに整えるのではなく、その音楽の、もっともその人らしい部分を伸ばせばいいだけだ。その結果としてなら、音楽がいびつになってもいい」。なにかと定型や定番が求められ、「ニュートラル」なものに安心しがちな社会の風潮にあって、この主張は新鮮だった。

『「ニュートラル」という言葉が間違っただけの意味で使われていると思うんです。ニュートラルというのは本来、『その人に合っている』、つまり『その人にとって本質的』ということ。物事が正しい位置にあることであって、『平均』ではない。その見方でいくと、むしろ平坦に均された状態のほうこそ不

自然。そこから抜け出すには、『常識』のように迫ってくるものを信じすぎないほうがいいのでは、と思います。みんな、漠然と恐怖を感じて、周りに合わせたり、SNSなんかで少しでも自分をよく見せようとしたりと腐心しているけれど、じつは誰もそんなことを強いてはいないんです」

たしかにZAKさんの発言は、ときにこちらが戸惑うほど真っ直ぐだ。率直なコミュニケーションがアーティストたちとのあいだに何度も交わされて音の粒が立っていく、そんなスタジオの風景が目の前に立ち上がってくる。ところで、社会変革のために音楽が持ち出されたりすることについて、ZAKさんはどう思っているのだろうか？ 最後にそう問いかけた。

「音楽は、政治的・社会的な目的を達成するための道具や手段ではありません。デモのような政治的な活動への参加を頼まれることもあったけれど、断ってきました。音楽それ自体から離れた目的を持つ音楽は、音楽として魅力的ではないからです。僕としては、音楽そのものを探究することで、先ほども話した、人々の中の『豊かな世界のイメージ』を広げたい。音楽家や音楽関係者は、わかりやすい社会活動から距離を取って深く音楽に内在することによっても、別の仕方

いま「合奏」は可能か?——心・技・体を整えて広場にのぞむために

2020年3月25日 初版第1刷発行

取材 清宮陵一 杉原環樹 綾女欣伸 大内伸輔（アーツカウンシル東京）
執筆 杉原環樹 [インタビュー] 清宮陵一 [まえがき]
写真 長谷川健太郎 [p.11, p.15, p.43, p.47] 山本マオ [p.31, pp.40-41]
加藤甫 [p.55] 清宮陵一 [p.21]
デザイン 加瀬透
編集 綾女欣伸

発行 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073
東京都千代田区九段北4丁目1-28九段ファーストプレイス8階
TEL 03-6256-8435 / FAX 03-6256-8829
<https://www.artscouncil-tokyo.jp>

印刷・製本 アイユー印刷株式会社

©アーツカウンシル東京 2020 Printed in Japan

ISBN 978-4-909894-12-0 C0070

All Rights Reserved.

文化でつながる。未来とつながる。

Tokyo.Tokyo
FESTIVAL

ARTS
COUNCIL
TOKYO

